

自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した 療育プログラムの検討 (26)

一文脈を踏まえた応援行動に注目して—

A review of care and education program that supports diversity and individual initiatives
of children with ASD: Focusing on cheering in the context in group activities.

○近江 涼音¹⁾・小林 藍¹⁾・向井 直史¹⁾・柳井 有加里¹⁾・松元 佑²⁾・荒木 穂積¹⁾
・竹内 謙彰³⁾・佐野さやか⁴⁾・矢藤 優子⁴⁾

○Suzune OMI, Ai KOBAYASHI, Naofumi MUKAI, Yukari YANAI, Yuu MATSUMOTO, Hozumi ARAKI,
Yoshiaki TAKEUCHI, Sayaka SANO, Yuko YATO

(¹⁾立命館大学大学院人間科学研究科・²⁾立命館大学大学院社会学研究科
³⁾立命館大学産業社会学部・⁴⁾立命館大学総合心理学部)

(¹⁾Ritsumeikan University Graduate School of Human Science・²⁾Graduate School of Sociology・
³⁾College of Social Sciences・⁴⁾College of Comprehensive Psychology)

Key words: 応援行動, 自閉症スペクトラム (ASD), 療育プログラム

目的

本グループは、小学生 (高学年)・中学生・高校生の ASD 児を対象とした療育プログラムの開発に取り組んできた。ASD 児は、社会的文脈に応じて自分の行動を調整することが困難と言われている (傳田, 2017) が、療育プログラムの中で他者を応援する行動が見られた。本研究では、子どもの遊びの中で生じる応援行動の特徴や意味を明らかにすることを目的とする。応援行動とは「参加児が課題に取り組んでいる他者に対して声掛けや拍手をして励ますこと」とする。

方法

2022年10月～2023年1月で、3回本プログラムに参加した ASD 児 2名 (以下 A, B とする) を対象とした。分析場面としては、10月 (けん玉), 11月 (チャンバラ大会), 12月 (サンタ検定), 1月 (障害物競争) の各場面とした。毎回、活動中における参加児の様子をビデオカメラで記録した (120分)。その記録をもとに応援行動の特徴と意味を前後の文脈も含めて分析した。

結果

参加児の応援行動の特徴を表1にまとめた。抽出した応援行動は全部で9エピソード (A : 5, B : 4) であった。その結果、Aは「イケル イケル」という声掛けが多く見られた。また応援行動を行うに至るまでの文脈を見ると、Aは自身も経験したことや、他児が課題に際して「ワタシ デキルカナ」と発言した際に、声掛けを行っていたことが分かった。一方でBは、課題成功につながるアドバイスやAと同様に「イケー！」という声掛けも見られ、応援行動にバリエーションが見られた。応援行動後を見ると、参加児が課題に成功した際に一緒に

喜ぶなど、応援行動後も他者に関心を持っている様子が観察された。

表1 応援行動の特徴

参加児	応援行動の内容	対象	応援行動前(本人の行動)	応援行動後(本人の反応)
A	・「イケルイケル」などの声掛け (5/5)	・スタッフA課題の取組み時(1/5) ・スタッフB課題の開始時(1/5) ・参加児B課題に「ワタシデキルカナ」と発言した時(1/5)、課題の取組み時(2/5)	・他者に課題の挑戦を求める(2/5) ・自身のした課題を他者がする様子を 見ている(3/5)	・その場を揺れる(1/5) ・手を高くあげて拍手する(1/5) ・新たな課題のリクエストをする(1/5) ・他者が課題の進行している時に「天国と地獄」を歌っているスタッフを制止する(1/5)
	・アドバイスなど課題成功に繋が る声掛け(2/4) ・「イケー！」などの声掛け(2/4)	・スタッフC課題の達成直前(1/4) ・参加児A課題の達成直前(1/4) 課題の開始直後(2/4)	・他者の課題進捗前にメール確認(3/4) ・他者が課題に取り組む様子を見る(1/4)	・他者が課題に取り組む様子を見る(2/4) ・「オー！」と言いつながら拍手する(1/4) ・次の課題を確認する(1/4)

※本研究は、立命館大学の研究倫理指針に基づいて進められている。研究発表にあたってはプロジェクト参加児の保護者の同意を得ている。

考察

本研究では、療育プログラムに参加している ASD 児の応援行動を、その文脈も含めて分析した。その結果、使用される発言など、参加児によって応援行動が質的に異なっていることが分かった。また応援行動の生起する場面や応援行動後の行動など、応援行動全体の文脈も様々に異なっていた。文脈の中での応援行動は単体の事象ではなく、他者の課題達成後に一緒になって喜びを表現したり、他者を賞賛したりする行動が続く一連のプロセスである。そのようなプロセスを通じて参加児は他者への関心を伝えている。このように応援行動は ASD 児の社会性の発揮の一形態として見ることができる。

また、応援行動は他者が課題に取り組んでいる際に生起している。このことから参加児たちは、勝敗や成否が決まるプログラムに参加することで、他者を応援するという機会を得、その機会を通じて他者と社会性を発揮しあっていると考えられる。参加児たちは課題を媒介として応援行動という形で他者と関わっているといえる。

引用文献

傳田 健三 (2017). 自閉スペクトラム症 (ASD) の特性理解 心身医学, 57, 19-26.